



安成 理事長

自然素材型住宅を手掛ける全国の工務店が参加する協同組合木の家の健康を研究する会（安成信次理事長）は、インフルエンザA型（H3N2コロナ株）ウイルスを用いて杉材の抗ウイルス性に関する実験を行い、杉ムク材がインフルエンザウイルスA型の感染力を99・9%以上低下させることが確認された。研究結果を24日、実験した九州大学農学研究員の清水邦義准教授が発表した。

ムク杉材の抗ウイルス性確認

2時間で99・9%不活化

木の家の健康を研究する会

杉は、黄色ブドウ球菌の培養実験を通じて抗菌作用があることが実証されている。今回、新型コロナウイルスと同様にエンベロップ（細胞膜）を持つインフルエンザウイルスで抗ウイルス作用が実証できたことで、新型

コロナウイルスにも同様の効果が期待できるという。

実験ではムクの杉板（天然乾燥、高温乾燥）と合板に樹脂シートを張った化粧合板の各表面上にウイルス液

合板の感染力の低下は1桁にとどまった。JIS規格の抗ウイルス試験では感染力が2桁以上低下しない限り、効果なしとみなされる。そのため、化粧合板の感染力の低下は述べ、杉ムク材の材質による効果である可能性を示した。今後、木材学会等で発表するところ。

同様の実験では昨年4月に香港大学が木、しかし、その際に実験に使われた木材の樹種は明かされていない。また、九州大学はさきごろ、弱毒性のコロナウイルスを入手。同ウイルスを使って今回と同様の実験を行い、結果を5月にも公表する予定。

同組合では、香り成分や調湿性、抗菌、認知症抑制、睡眠、集中力など、杉を内装に使った様々な実験データをまとめた冊子「健康に良い自然素材の木の家」を発行しており、3月下旬に今回の実験データを加えた改訂版の増刷を予定している。

を滴下し、2時間後に回収したウイルス液の感染力を調べた。その結果、杉ムク材の表面（無塗装、プレーナー掛け）に滴下したウイルスは感染力が3桁以上低下した。一方、化粧

板の低下は抗ウイルス効果とは認められないという。福岡市役所で行われた会見で清水準教授は「今回の結果は杉の調湿性と芳香が関係しているのではないかと世界的話題となった。

布ガラス、紙幣、ステンレス、プラスチック等の素材で比較した実験結果で、木材や布は金属等比べてウイルスの生存期間が短かったことなどを発表し世界的に話題となった。

今回の実験を主宰した安成理事長は「抗ウイルスに関しての木材を使った実験は国内では初めてではないか。ムク杉材の抗ウイルス性を実証することで林業や地域の製材業の活性化につながることを期待している」とコロナ禍を逆手にとって林業活性化の足掛かりにした

い考えだ。